

国語（教育学部国語教育専攻）
90分 200点 / 上記を除く全学部・学科・専攻
60分 100点

注意事項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) 解答にはHBまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはHBまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- (3) 受験する学部（専攻）によって解答すべき問題を指定しているので注意すること。

受験する学部（専攻）	解答すべき問題	解答方式	解答時間
教育学部国語教育専攻	一・二・三・四・五	マーク・記述 ※すべての問いに解答必要	九〇分
右記を除く全学部・学科・専攻	一・二・三・四・五	マーク *記述式の問いは解答不要	六〇分

- (4) 一・二・三の解答は、**マーク式解答用紙**の解答欄にマークしなさい。氏名・受験番号・解答科目を記入し、受験番号・解答科目をマークしてから解答を始めます。例えば、10と表示のある問いで「③」と解答する場合は、下の（例）のようにマークしなさい。

- (5) 一・二内の**記述式の問いと四・五**の解答は、**記述式解答用紙**の解答欄に記述しなさい。改めて氏名・受験番号を記入してから解答を始めます。例えば、**記述式 2**と表示のある問いでは**2**の枠内に記述しなさい（枠外にはみ出したものは無効）。字数制限のある場合は、句読点・カッコも一マスを使うこと。

- (6) (3)の表に指定する「**解答すべき問題**」以外の問題に解答しても、その解答は**採点の対象外**とします。

- (7) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

(例)

解答番号	解	答	欄
10	①	②	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

国語（全学共通）

* 全員がマーク式の解答用紙に解答すること。

* 国語教育専攻を志願する者も解答すること（国語教育専攻のみの問題を含む）。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし問8～問9（1～2）は、教育学部教育学科国語教育専攻を志願する者のみ答えなさい。

西洋では、言霊や物霊が比較的排除されやすいのはどうしてなのかを少し論じておこう。これは^{（注1）}山本七平も書いているように、ユダヤ教やキリスト教（とりわけプロテスタント）、そしてイスラム教には「偶像禁止」があるが、その理由を、山本は次のように述べている。

神のみが絶対者であるとすれば、被造物のこの世界はすべて相対的であって、その中の特定のものを崇拜することは神に対する冒瀆^{ぼうとく}となる。人間の相対世界による絶対世界の侵犯である。だから、ヒトラーであれ、スターリンであれ、神の被造物の崇拜は神に対する冒瀆だ。同様に、イエス・キリストや聖人などの図像や彫像という物質の崇拜も間違っている。物質は物質なのであり、物質の背後に何か霊的なものが臨在すると見なし、これを礼拝するなどということは被造物に支配されることを意味し、それもまた神に対する冒瀆を意味するのである。

確かに『^{（注2）}創世記』では、Xで超越的な神が万物を作った。創造主である神はむろん物ではない。一方、被造物はすべて物なのである。自然も世界もすべて物質的なものでできている。自然や生き物をすべて創造した最後に、神は人間を自らに似せて作り、肉体という物質性に神的なものである魂、精神を吹き込んだのである。

この精神という神的なものを与えられたがゆえに、人間は物的な自然を支配し、世界を管理することができる。この思想が、やがて近代社会ともなると、神は後景に退き、人があたかも神であるかのように、理性の力で自然から途方もないエネルギーを引き出し、自然を自らに便利なように作り変える。こうして、A科学や技術が自然を征服し、そのエネルギーによって社会を進歩させるという近代の神話が生み出された。

同様のことは、古代ギリシャを振り返ってもわかるであろう。ソクラテス以前のギリシャの「自然（フュシス）」は、もともと宇宙世界、a森羅万象の全体を指す壮大な概念であり、しかもそれは、たえず生成、展開、変化しつつもそこに恒常的な秩序をもつものであった。そこでギリシャ人は、その「自然（フュシス）」の内に、それを動かし、また支え、秩序を生み出すある根源的な働きを探り、そのすべてを構成している基本的な要素を見出そうとした。イオニア学派の四元素やデモクリトスのアトムなどであり、ヘラクレイトスが考えた運動も同じである。そこにまた、「自然（フュシス）」が現代の「自然（ネイチャー）」となり、物事の「本質」を意味する

こととなる理由もあった。

だが、**B** 大きな転換はプラトンによって生じた。プラトンは、あらゆる存在物の究極を、人間の目には見えず、決して現象としても経験としても把握できない「アイデア」にみた。そしてこの世界の一切を、アイデアの写しとみなした。これは、ギリシャ思想を一変させたのである。なぜなら、アイデアの登場によって、宇宙も世界も人間も社会も含めて万物が持っている一つの秩序という「自然（フュシス）」観念は破綻し、アイデアという高度な精神的なもの、あるいは霊的なものが、「自然（フュシス）」から分離されたからである。

こうして、「自然（フュシス）」は、天界のアイデアによって初めて命を吹き込まれる物質的な素材となった。そこに、アリストテレスのいう「形相（エイドス）」と「素材（フュレイ）」の分離が生じる。アイデアが人間の精神の側に移行し、「自然（フュシス）」は、それが働きかける単なる「素材（フュレイ）」になったわけである。

人は頭の中にある、もしくは深い精神作用によって観照されるアイデアをもとに、「自然」という物質界に働きかけて、自らのために何ものかを制作するのである。「つくる」ことが決定的となった。塑像であれ、宮殿であれ、はたまた都市であれ、政治制度であれ、ギリシャ人は、それをできるだけアイデア（理想）に近づけて「つくる」のである。こうして、人間が「自然」に働きかけて、何かを「つくる」ことこそが西洋文化の根底にある。

これに対して、日本の自然観は大きく異なっている。何よりもまず、それは、そのもともとの読みである「自然」に示されているように、「おのずからある」あるいは「おのずからなる」という意味であり、とりわけ「おのずからなる」といった時には、そこにはあきらかに「生成」の意味が含まれてくる。その場合、生成とは、何らかの外的な意思や力の作用による運動変化ではなく、そのもののうちに宿るある働きによる生成・変化にはかならない。相良亨『日本の思想』によると、「ある」と連動した「あり」の語には「アラワレ」と共通する「出生・出現」の意味があり、そうすると、「ある」にせよ、「なる」にせよ、その「アラワレ」の背後には、出現・生成をもたらす根源的な力が想定されている。根源的な力は、今日の科学のように、何らかの分析的な形式において捉えうる力学的運動ではなく、あたかも、花のつぼみが開花するように、何らかの働きによって現れ出るのである。そこには、神秘的な作用があるといってもよい。日本の自然観によれば、何かが「ある」ということは、「おのずとなることの帰結としてそこにある（アラワレル）」ということなのだ。

そして、日本人は、物事が人為的・意図的に作り出されるというよりも、物事が「自然にできあがる」とか「自然のままにある」といった方を好む傾向をもつ。ものがあるということ、つまり「存在」の^(註3)プロット・タイプとなっているのは、あくまで「自然（ジネ

ン」概念であつて、その基調を作っているものは「C「おのずからある・なる」なのである。「あるもの（存在）」は、「おのずからなつたものとしてそこにある」というわけである。

よく知られるように、^(注4)丸山眞男は、江戸期の日本思想を論じるなかで、この日本的な「自然」概念に対して、^(注5)荻生徂徠の唱えた古の聖人の道（制度）のうちに「作為」の契機を見出した。日本的な「自然」に対して西洋近代的な「作為」が対比される。そして、徂徠の古文辞学のなかに、日本の「近代化」のかすかな**b**萌芽を見出そうとしたのであつた。

確かに、西洋の存在思想には、「つくる」の発想が連綿と続いている。この世界のあらゆるものは、基本的に、誰か、もしくは何か（たとえば、神）によって「つくられた」ものだという理解である。ただそれは、西洋近代に限られたことではない。ハイデガーが述べたように、古代ギリシャから中世キリスト教、そして、近代の合理的思考まで一貫して西洋文化の水脈において引き継がれてきたものであつた。

キリスト教的思考を拒否したデカルトの合理主義においてさえ、「主体Ⅱ精神」と「客体Ⅱ物的なもの」の分離が前提となり、主体が、合理的な精神によって自然に働きかけ、それを数学的といつてもよいやり方で再構成するのである。精神が、合理的に自然や世界を構成するのである。これも「つくる」の発想にほかならない。

このような発想は日本にはきわめて薄い。だが **D** 日本の近代化の不徹底の原因が、日本の伝統的な自然観にあるとすれば、問題はかなりやつかいなものとなる。それは、果たして近代化の程度の問題なのであるうか。そうではなく、日本と西洋の自然についての「類型」の相違ではないのか。それは歴史の「段階」の問題ではなく、文化と思想の「類型」の相違ではないのか。

後年になって丸山は、世界の神話の基本的な範疇^{はんちゆう}を「つくる」「うむ」「なる」の三つに区別し、特に **P** 「つくる」と「なる」の対照的な位置に注目した。そして『古事記』を素材に、「なる」こそが日本神話の発想の根底にある、という。いうまでもなく、これは日本の自然観とパラレルであつた。神々の誕生のように、あらゆる事物が、次から次へと、おのずと「なつてゆく」。そこには、「作為」もなく、当然、物事を動かす責任を背負つた「主体」もない。

いわゆる進歩派知識人からすれば、「つくる」と「なる」の対比、「作為」と「自然」の対比、あるいは、丸山の『日本の思想』における「すること」と「であること」の対比。これらはすべて、日本における「主体」の欠如を指し示す強力な状況証拠であつた。そしてそれこそが、日本における「無責任の体系」を生み出し、近代的な民主主義や自己責任意識の形成に失敗した原因だということになる。

このような理解がありうることを私は否定しないが、それでは、E 日本人のもつ「自然観」の決定的な論点が見えてこないように思われる。「おのずからある・なる」の自然観には、万物を無窮の生成変化において理解するという独特の存在意識がある。自然の森羅万象を生成変化させるものは、その中に隠されたある種の生命的な力であり、古代の日本人は、それを「カミ」といい、また「魂（タマ）」といった。一種の靈妙な力であり、作用である。植物は地中から芽を出し、成長し、開花し、やがて枯れて大地へと消えてゆく。しかし、季節がめぐれば、それはまた芽を出す。『古事記』では、神は葦から成ったかのように記述しているが、人もまた同じである。こうして、人も山河も植物も森林も石ころも、ありとあらゆる存在は、それをすべて包括する宇宙的なYのなかで、生死を繰り返す。しかし、そのYの背後には「カミ」といふべき生命の働きがある。

Q おそらく、『方丈記』のよく知られた書き出しほど、日本人の自然観と死生観を示しているものはないであろう。人の生死など、河の流れのなかに浮かんでは消えてゆくうたかたのごときものである。河の水も刻々変わってゆく。しかし、河の流れは決して絶えることはない。河の水も、また人の生も、果たしてどこからきてどこへゆくのか、誰にもわからない……。

（佐伯啓思「日本人とは何なのか『空気』と『自然』による」）

（注） 1 山本七平——評論家（一九二一～一九九一）。

2 創世記——ユダヤ教、キリスト教の聖典。

3 プロト・タイプ——原型となるもの。

4 丸山眞男——政治学者、思想史家（一九一四～一九九六）。

5 おぎゅうそらい 荻生徂徠——江戸時代中期の儒学者（一六六六～一七二八）。古文辞学派を興した。

問 1 波線部 a～c の本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は 1 ～ 3。

「a 森羅万象」 1

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ① 自然の創り出す神秘的な象形 | ② 現実世界の変化し続ける現象 |
| ③ 人間の想像を超越した世界の事象 | ④ 自然界には存在しえない現象 |
| ⑤ この世に存在するすべての物や事象 | |

「b 萌芽」

2

- ① 物事を始めるきっかけ
- ② 物事の正しい筋道
- ③ 物事に内在する可能性
- ④ 物事が起こるきざし
- ⑤ 物事への正しい理解

「c 無窮」

3

- ① 少しずつ消えていく様
- ② 予測がつかない様
- ③ 果てしなく限りない様
- ④ 見とおしが立たない様
- ⑤ 変化しつづける様

問2

X

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、Y は二か所あるが、同じ言葉が入る。解答番号は 4 と 5。

X

4

- ① 絶対的
- ② 創造的
- ③ 開明的
- ④ 人為的
- ⑤ 相対的

Y

5

- ① 栄枯盛衰
- ② 生々流転
- ③ 唯一無二
- ④ 天衣無縫
- ⑤ 因果応報

問3

A

「科学や技術が自然を征服し、そのエネルギーによって社会を進歩させるという近代の神話が生み出された」のはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 神が自らに似せて作ったとされる人間は、神がなしえなかった自然の征服を自らの使命と考えたから。
- ② 神により創造された人間は、自然を便利なものにするためには新たな神を創造し世界を管理するのがよいと考えたから。
- ③ 神から精神という神的なものを与えられた人間は、神に替わって自然を便利なように作り変えられると考えたから。

- ④ 神により自然の一部として創造された人間は、神に頼るのではなく自然の力を利用しようと考えたから。
- ⑤ 神から自然を自らにとって便利に作り変えることを許された人間は、自らが神とならねばならないと考えたから。

問 4

「B 大きな転換はプラトンによって生じた」とあるが、本文からうかがえるプラトンの考え方の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① あらゆる存在物の究極は、「自然」の中に存在するのではなく、そこから分離されたところにある。
- ② 万物が持っている秩序は、「自然」のうちにあり、人間の精神的作用により現実的な意味を持つようになる。
- ③ 万物が持っている秩序は、時代や社会の変化の影響を受け、あらゆる存在物の究極とは一致しないものである。
- ④ あらゆる存在物の究極は、人の頭の中に存在するものであり、「自然」とはそれを形にしたものである。
- ⑤ 万物が持っている秩序は、人が「自然」に働きかけて、何かを創り出す過程で生まれるものである。

問 5

「C おのずからある・なる」を、筆者はどのようなものとして考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 8。

- ① そこに存在するものは、神秘的な作用を受けることで、想定されたものとは異なるものとして出現したものである。
- ② そこに現れているものは、根源的な力の作用によるのではなく、何らかの大きい意思に導かれて現れたものである。
- ③ そこに存在するものは、自然の力だけではなく、何らかの力を働かせた人の意思が加わって現れたものである。
- ④ そこに現れているものは、何らかの外的な力をきっかけとして、根源的に備わっていた力により出現したものである。
- ⑤ そこに存在するものは、外的なものの影響によるのではなく、何らかの内的な働きによって現れたものである。

問6

「D」日本の近代化の不徹底の原因が、日本の伝統的な自然観にある」と主張する人の考えを、筆者はどのようなものと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は9。

- ① キリスト教的な思考を持つ人たちは、日本人は急激に変化する環境に対して、西洋人と同じように合理的精神をもってかわることができなかった、と考えている。
- ② 進歩的な考えを持つとされた人たちは、日本人には自らが置かれた社会状況に対して、責任をもつて関わろうとする主体性が備わっていなかった、と考えている。
- ③ 西洋的な合理主義を大切にする人たちは、日本人には近代化が必要とされる状況において、西洋のように自然を作り変えることを是認できなかった、と考えている。
- ④ 保守派と呼ばれる知識人は、日本人は自然のままにあることが許されない状況に置かれて初めて、自らの意思で自然へと働きかけるようになった、と考えている。
- ⑤ 自然を大切にする人たちは、日本人には合理的思考が必要とされる状況においても、自然を神と崇拝する潜在的な意識が備わっていた、と考えている。

問7

「E」日本人のもつ「自然観」の決定的な論点」について、筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は10。

- ① 日本人は、人を除くすべての自然の中には、ある種の神秘的な力が備わっており、その力により永遠に成長と開花を続けるものであると考えている。
- ② 日本人は、この世のすべてのものは、神の意思の関わりがないところで生成変化するため、人間もまた自らの意思で成長することができると考えている。

- ③ 日本人は、ありとあらゆる存在は、内在するある種の生命的な力によりこの世に生まれ、人の力により永遠の力が与えられるものだと考えている。
- ④ 日本人は、この世に存在するものの背後には、霊的なものが存在し、その力の作用により万物は永遠に生成変化と出現を繰り返すものであると考えている。
- ⑤ 日本人は、山河や植物といった自然には、人間にはない超越的な力が備わっており、人間はその意思や力に従って生きるだけの存在であると考えている。

*** 次の問 8 ～ 問 9 (1 ～ 2) は、国語教育専攻を志願する者のみ、国語教育専攻の記述式解答用紙に解答すること。**

問 8 「P」つくる」と「なる」の対照的な位置」とはどういうことか。西洋と日本の考え方の違いを明らかにしながら、次の【 】

内に当てはまるように**四〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 1**。

自然は、西洋では、【

】と考えている。

問 9 「Q」『方丈記』のよく知られた書き出しほど、日本人の自然観と死生観を示しているものはないであろう」とあるが、ここという

日本人の死生観とはどのようなものか。次の【 】内に当てはまるように**四〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 2**。

日本人は、【

】と考えている。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし問9と問10（3と4）は、教育学部教育学科国語教育専攻を志願する者のみ答えなさい。

俳句は頭で理解するものではありません。また理屈で組み立てるものでもありません。たくさん作ってたくさん読んで、身体が覚えていくものです。

たとえば、俳句の「（注）二物衝撃」とか、季語のつき過ぎ、離れ過ぎなどといった取り合わせの問題、これらは、頭で理解しようとしても無理です。仮に理解できたとしても、実践ではなかなか使いこなせないでしょう。

とにかく作って、作って、作る。読んで、読んで、たくさんさんの名句に触れるしかありません。やがて「あ、これか」という感覚に、自分の身体を導いていくしかない。自転車乗りと同じです。頭で理解するのではなく、**X**に納得するもののなのです。

自分自身のことを振り返って、幸運だったと思うのは、父が俳句をやっていたために、小さい頃から日常に俳句があった点です。たとえば、夕食中に父が、

「今日の句会で五所平之助先生がね……」

という話を始めます。五所平之助先生とは、映画監督で第一作目『伊豆の踊子』を作った方です。「春燈しゅんとう」という結社で俳句をやっておられました。父に俳句の**a**手ほどきをしてくださった縁で、毎月私の実家がある湯河原に句会指導に来てくださっていました。

A 沈丁しんちょうや夜でなければ逢あへぬ人 五所平之助

父がご飯を食べながら言いました。

「五所先生の句なただけだね、『沈丁』が効いているんだよねえ」

幼心に私は、夜でなければ逢へぬ人ってどんな人……？ なんて「沈丁」なのかなあ……などと考えました。

「沈丁花」は **b**可憐かれんな姿もさることながら、甘い香りが印象的な花です。わけても夜になると芳かぐわしく香ります。そんな「沈丁花」と、

「夜でなければ逢へぬ人」の関係性。これは、理屈で理解できるものではありません。なぜなら作者自身が決して理屈で作っていないからです。俳句は瞬間にイメージがつかがるものです。

たとえば「沈丁」を「白梅」に変えたらどうでしょう？ 「白梅や夜でなければ逢へぬ人」。或いは「水仙ある」はどうでしょうか？ 同じ春の花でもまったくイメージが変わります。五所先生が「沈丁」を季語に置いたのは、たまたまそこに沈丁花が咲いていたからではありません。「夜

でなければ逢へぬ人」に最もふさわしい花、その人の **面影** おもかげ を引き出すために最も適った花が沈丁花だったのです。なぜ沈丁花が最もふさわしい花か……これはもう理屈ではなく、感覚、感性の次元です。そこに沈丁花の季語としての本情・本意が十分に働いているわけです。このように季語の働きや、取り合わせの妙、二物の間の呼吸など、理屈でなく感覚で分かっていくものに、私は子どもの頃から日常の中で親しんでいたのです。

直感とは、感覚でなく実は体験です。体験の積み重ねから直感はやってくるものだと思います。

たとえば初めての土地で、目的地までの移動を徒歩でしている最中としましょう。あるところにさしかかると、道が二つに分かれています。さて、どちらに進みましょうか。

こういう場合、**P** 私はこちらに行つたらよいかが、なんとなくわかるんです。そしてたいてい「当たり」です。「**Y** 黛 まゆずみ さんて、**Y** がいいですね！」旅の同行者によく驚かれます。どちらに行けばいいか、なんとなく匂うんです。しかしそれは、直感のようであり、直感ではないと思うのです。

私は、旅の多い暮らしをしています。徒歩でサンチャゴ巡礼道を約九〇〇キロ、韓国の釜山 プサン からソウルまで約五〇〇キロ歩きました。ピレネー山中で道に迷ったこともありましたが、韓国では道が見つからず線路を歩いたこともありましたが、そういった旅の途上で、意識・無意識にかかわらず蓄積されたさまざまな経験が、判断する上で瞬時に働いているのだらうと思います。

地形や空の明るさ、雲の流れ方、下草の生え方、町の匂い、音など、五感を使っているいろいろなことから判断しているのでしょうか。身体を通して体験したことが、無意識に情報として集積されている。その記憶のストックの中から私の身体が瞬時に判断したことが「嗅覚」となり、「直感」となっているのでしょうか。

俳句を作る上でも同じようなことが言えます。俳句は「直感の文学」と言われますが、だからこそ、さまざまな体験の積み重ねから生まれるのです。

たとえば桜を見ます。桜を通して、自分がしてきた体験がどれほどあるか。これが俳句を詠む上では、とても大事なことになると思います。桜にまつわる思いや想念がどれほど深くあるか、どれだけ自分の体験の中にそれがストックされているか、これが鍵になるでしょう。桜が咲くころの気象、桜が咲く環境も共通認識として想起されなくてははいけません。ストックの中には古来桜がどのような詠まれてきたかという古典の知識も含まれます。日本人としての桜に寄せる共通の概念、たくさんのおびただの古歌。この夥しい蓄積の上に、**B** 詩歌の世界の桜は咲いているのです。そして私たちは「俳句の目」を通して桜の下に佇ち、桜に挨拶をするのです。

さまざまの事おもひ出す桜かな 芭蕉

一つの花をめぐる様々な体験があった上で、再びその花を見たときです。誰もがその再会の瞬間に、ふっと思うことがあるでしょう。イマジネーション（imagination＝想像）が記憶をおとす時、俳句のひらめきはやってきます。ひとつのモチーフを前にして俳句を作ろうとした時、これまでそのモチーフをめぐる積み重ねられた体験の一つ一つを、想像が訪ねていきます。そして想像とある過去が出会いを果たしこれまでにない響きを奏で合った時、ひとつの新しい世界が創造されるのです。これが俳句のひらめきです。

物質の豊かさが精神の豊かさに結びつかないということは言うまでもないでしょう。私は、豊かさとは、視点をたくさん持つことだと思います。生まれてから死ぬまで、誕生と死という二つの定点は変えられません。

そんな宿命の中で、いかに視点を多くもっているか。いかに多くのものを見るか、それが豊かさに結びついていくのではないでしょう。俳句のひらめきとは、そんな豊かさによってもたらされるものにほかならないのです。

俳句は「断定の文学」と言います。俳句はそもそも俳諧の連歌の発句でした。発句は連歌の一番目の句であるため、^{注2}脇句や平句に凭れ^{もた}かからない独立した句を求められました。

山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉

と芭蕉が詠んだ以上、山路を来た芭蕉にとって^{すみれ}蕁は「何やらゆかし」だったのです。断定なのです。「隣にいる曾良さんのご意見も聞いてみましょう」とはなりません。ましてやこの時代、詩歌では蕁は野に詠むものでした。蕁は山に詠まずというタブーをあえておかしまで、芭蕉は断定したのです。

ゆえに **C** 俳句は一人称の文学と言われます。日本では古来自我を通すよりむしろ他者との和を重んじます。連歌は複数の人で座を構成しました。そのため発句は断定しますが、その断定を万人に押し付けはしません。断定しつつ、他者に委ねます。俳句は短い。だから言い訳も説明もできない。言い切ったら、あとは読み手や^{注3}連衆に任せるのです。

D 一月の川 一月の谷の中 飯田龍太

究極の省略、究極の断定と言ってもよい句です。読み手が試されているかのような句でもあります。読む人によって様々な受け取り方が許容されています。読み手はこれまでの経験の^{ひきだし}抽斗を開け、この情景を描き、余白に漂うものを感じようとしています。或いは余白をクリエイトしようとしています。人によって見えてくる谷の深さや川の幅は違うことでしょう。

掲句のポイントは「一月」にあります。二月でも三月でもないのです。私は厳寒の谷を一心に流れる川を思います。ふるさとの山河

でしょう。新年のめでたさと清浄感があふれる谷を貫く一条の流れ。父祖の地を流れつづけてきた川です。年は変わり、人々は年老いても変わらぬふるさとの山河です。私はこの句から自然の厳しさと大きさ、川の潔さとひたむきさ、自らの小ささと寂しき、あふれんばかりの郷愁を覚えます。

俳句は説明がないので、読み手によって川の大きさや佇まいに違いがあつて当然です。しかし一句を貫く^(注4)ポエジーは同じように句の余白に響くはずです。これが俳句の懐の深さです。断定といっても決して押し付けの断定ではないのです。

このように言葉にならない部分（余白）に、作者が伝えたい思いや思想が隠されています。俳句は、その余白にこそ深い意味があります。そしてそれゆえにたった一七音という、世界で一番短い表現形式が文学として成立するのです。なお、俳句の余白は、季語や切れなどによって生まれます。

「言ひおほせて何かある」とは芭蕉の言葉です。言葉で説明し尽くしたところで、何があるというのだ……。言いおおせない、言いおおせないがゆえにより深いところに響くものがあるわけです。

私が俳句を詠むとき、言葉を紡いでいるには違いないのですが、同時に、余白を紡いでいるような感覚があります。言葉を紡ぐ＝余白を紡ぐという感覚で作ります。

一方、読み手も余白が抱えている情趣や思想を享受できなければ、俳句の本当の良さは分らないはず。読者と作者の共同創作が俳句なのです。

（黛まどか「俳句脳——ひらめきと余白」による）

（注） 1 二物衝撃——俳句の手法の一つ。相互に関連がない二つの事物を一句に仕立てることで、新しい情趣を生み出すこと。

2 脇句や平句——発句に付ける句を脇句、その次を第三の句、最後の句を平句と呼ぶ。

3 連衆——連歌・俳諧の会に作者として列席する人々。

4 ポエジー——詩情。

問 1 波線部 a ～ c の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **11** ～ **13**。

「a 手ほどき」

11

- ① 初歩を教えること
- ② 奥義を伝えること
- ③ 模範を示すこと
- ④ 特訓を施すこと
- ⑤ 要点を説くこと

「b 可憐な」

12

- ① 美しく華やかで人目を引く
- ② 上品で奥ゆかしい美しさを持つ
- ③ 姿形がかわいらしく守ってやりたくなる
- ④ ひ弱そうな感じがして救済を求めている
- ⑤ 派手でいつまでも見飽きることのない魅力がある

「c 面影」

13

- ① 特徴をよく表す姿
- ② 現実に存在しない幻影
- ③ 想像に浮かぶイメージ
- ④ 生き生きとした顔つき
- ⑤ 記憶に残る顔や姿

問 2 **X** に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **14**。

- ① 実践的
- ② 印象的
- ③ 感覚的
- ④ 理性的
- ⑤ 日常的

問 3 **Y** に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **15**。

- ① 運
- ② 記憶
- ③ 鼻
- ④ 要領
- ⑤ 勘

問 4 「A 沈丁や夜でなければ逢へぬ人」とあるが、筆者がここでこの俳句を引用した意図として、最も適当なものを、次の中から

一つ選びなさい。解答番号は **16**。

- ① 俳句の言葉を選ぶ際には、論理的な必然性が求められることを示そうとする意図。
- ② 俳句の言葉を選ぶ際には、作者の気分に従えばよいことを示そうとする意図。
- ③ 俳句の言葉を選ぶ際には、理屈によるものではないことを示そうとする意図。
- ④ 俳句の言葉を選ぶ際には、日常的な言葉を使うべきだということを示そうとする意図。
- ⑤ 俳句の言葉を選ぶ際には、美しいイメージが必要だということを示そうとする意図。

問5

「**B** 詩歌の世界の桜は咲いている」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 詩歌の世界では、桜についての作者の記憶と想像とが心の深いところで結びついて、文学表現としての桜が、現実の桜よりも幻想的な姿で表現されているということ。
- ② 詩歌に詠まれる桜は、桜にまつわる作者の体験に、古来から日本人が共通して抱いてきた桜についての自然や古典的知識に関わるイメージを加えて、成り立っているということ。
- ③ 詩歌の世界で取り上げられる桜は、古来より今に至るまで桜を題材として詠んできた多くの歌人たちの生活が、ありありと眼前に浮かぶように表現されているということ。
- ④ 詩歌の世界においては、古来から桜がどのように詠まれてきたかという日本の文学的伝統をふまえ、古典文学の様式にしたがって、桜が詩的に表現されているということ。
- ⑤ 詩歌に詠まれる桜には、日本人なら誰もが原体験として持っている、桜の季節において自分がそれまでに体験してきた多くの出来事や、桜にまつわる思い出などがこめられているということ。

問6 「俳句は一人称の文学と言われます」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

解答番号は **18**。

- ① 「山路来てゝ」の句が、俳諧の連歌の発句として詠まれて脇句や平句からの独立性を持つ上に、藁は野に詠むという伝統を破ってまで作者が断定した世界が表されている。このように俳句には作者独自の視点から捉えた世界が表現されているということ。
- ② 連歌は複数の人で座を構成し、発句においては断定するものの、その解釈は他者に委ねられている。したがってその句をどのように解釈するかは読み手や連衆しだいであり、一人ひとりがそれぞれに自由な解釈をすることが許されているということ。
- ③ 日本では古来自我を通すよりむしろ他者との和を重んじている。「山路来てゝ」という句においても、作者の芭蕉は句の意味について断定はしつとも言い訳や説明はせず、その解釈は他者に委ねることとで独善的にならないよう注意していたということ。
- ④ 藁は野に詠むものとされていた時代にあっても、山路を来た芭蕉にとっては藁があまりにも心ひかれる存在であり、タブーを冒してでも「山路来てゝ」の句を詠まずにはいられなかった。そのように、自分勝手に許されるのが俳句の世界だということ。
- ⑤ 俳句はそもそも俳諧の連歌の発句であり、複数の人によって構成される座の中で和を重んじながら詠まれたものである。よって作者の個性や感じ方は重要ではなく、最終的には読み手や連衆の一人ひとりに解釈を任せるようにしているということ。

問7 次に示すのは、「**D** 一月の川 一月の谷の中」の俳句について五人の生徒が話し合っている場面である。本文における俳句の解釈

のしかたに関し、筆者の考えとは異なる考え方をしているものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① 生徒A ― この俳句からは、雪が積もって高く切り立った谷の中を、細い一本の谷川が滝のように流れ下っていく光景がありありと目に浮かぶな。
- ② 生徒B ― そうだね。厳冬期のはりつめた寒気を鋭く切り裂くように、冷たい沢がまっすぐに流れ下っていく音までもが聞こえてくるようだね。
- ③ 生徒C ― 私は谷筋の町に住んでいるので、家の裏に流れてる川を想像するな。あまり水は流れてなくて、冬だから周りの

景色もモノトーンな感じ。

④ 生徒D ―― それは違うかな。やっぱり水が流れていなくちゃダメだよ。しかも谷の中と言ってるから、かなり急で早い流れをイメージすべきだよ。

⑤ 生徒E ―― 川の流れは急でも緩やかでもどちらでもいいと思うよ。でもやっぱり一月という言葉からは一心に流れる冬の川の冷たさが伝わってくるかな。

問 8

本文における俳句の「ひらめき」と「余白」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。 解答番号は 20。

① あるモチーフを前に俳句を作ろうとした場合、そのモチーフをめぐる経験を作者の想像が訪ねていくときに、想像と過去が出会うことで創造されるものが俳句の「ひらめき」である。一方、究極的に省略され、断定された俳句の表現に紡がれた作者の思いを、さまざまな手がかりをもとに論理的に推定していく際に使われるのが俳句の「余白」である。

② 俳句においては、体験と直感が重要で、人生における物質的な豊かさと精神の豊かさに支えられた体験と、研ぎ澄まされた感性に基づく直感が生み出すのが俳句の「ひらめき」である。一方、あえてすべてを語りつくさず、言葉を極限まで省略して削っていくことで、作者の心のより深いところに響いて生まれてくるのが俳句の「余白」である。

③ たとえば桜をめぐる印象的な体験があった人が、時を置いて再びその花を見ることにより過去の体験を記憶からよみがえらせ、全く新しい世界を創造するのが俳句の「ひらめき」である。一方、一七音しかない俳句において、伝えたくても伝えられない思いや思想を、季語の中に言外の意味として隠しておくために設けられたのが俳句の「余白」である。

④ 視点を多く持ち、様々な体験を重ねることにより、目の前の事象から生まれたイメージと過去の体験が脳内で出会い、五七五としての表現が生まれることが俳句の「ひらめき」である。一方、文字になっている部分以外にこめられた、言葉では言い尽くせない作者の思いや思想を、読者の経験にに応じて読み取ることができるのが俳句の「余白」である。

⑤ 物質の豊かさがなくても、たくさんのものを見ることで精神の豊かさが生まれてくるもので、多くの経験に基づく精神的豊かさによってもたらされるものが俳句の「ひらめき」である。一方、俳句がもつ深い懐の中を、句を読む人自らの経験と響き合わせながら探ることで見出すことができ、読み手によってクリエイトされるものが俳句の「余白」である。

*次の問9、問10（3、4）は、国語教育専攻を志願する者のみ、**国語教育専攻の記述式解答用紙**に解答すること。

問9 「P 私はこちらに行ったらよいかが、なんとなくわかるんです」とあるが、なぜわかるのか。「体験」・「判断」の二つの語句を用いて、**四〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 3**。

問10 「Q 読者と作者の共同創作が俳句なのです」とあるが、俳句を読むにあたって読者に求められていることは何だと筆者は考えているか。「余白」という語句を用いて、次の【 】内に当てはまるように**四〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 4**。

読者には、【 】

【 】が求められる。

三

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問

A～Hの各傍線部に相当する漢字を含むものはどれか。また、I～Jの空欄に入れるのに最も適当な語句はどれか。それぞれ一つずつ選りなさい。解答番号は **21** ～ **30**。

A シゲキの強い飲み物。 **21**

① メイシを渡してあいさつする。

③ 社員の行動シシンを定める。

⑤ 技巧をクシして楽器を鳴らす。

② 大臣が現地をシサツする。
④ 一服のお茶がシフクの喜びをもたらす。

B 私の友人はカモクだ。 **22**

① ゴウカな着物を仕立てる。

③ カジョウな出費をおさえる。

⑤ 財産分与のタカが決まる。

② 運動のフカを減らす。
④ 人事コウカを行う。

C 酸化カンゲン反応。 **23**

① 祖母は去年カンレキを迎えた。

③ 首尾イッカンした主張を述べる。

⑤ 知事はカンリョウ出身である。

② カンセイな住宅街に住む。
④ ヤッカンに同意する。

D 財を生み出すレンキン術などない。 **24**

① ヒレンの物語が語り継がれる。

③ ジュクレンの技がさえる。

⑤ 不当なレンバイを禁止する。

② 鉄鋼をセイレンする。
④ レンケイ協定を結ぶ。

E

キョウキンを開いて語り明かす。

25

① 国際社会のキョウメイを呼ぶ。

③ コウキョウ楽団の定期公演。

⑤ 母はドキョウのある人だ。

② キョウギの解釈では軍隊保有は違憲だ。

④ 像が映るようキョウメンを磨く。

F

王の前で自己をヒゲする。

26

① ゲ Netsu 剤を服用する。

③ ゲヒンな番組は見ない。

⑤ ゲシの日は夜が短い。

② ゲカ手術で快方に向かう。

④ ゾウゲは昔、印章の好材料だった。

G

財政難にオチイる。

27

① 市長はイカン^{イカン}の意を表明した。

③ 上司のカンシン^{カンシン}を買う。

⑤ トツカン^{トツカン}工事で仕上げる。

② 権力にカンゼン^{カンゼン}と立ち向かう。

④ 地盤がカンボツ^{カンボツ}する事態となった。

H

鉄をギタ^{ギタ}える。

28

① ダイタン^{ダイタン}に振る舞う。

③ 体をタンレン^{タンレン}する。

⑤ タンネン^{タンネン}に調べる。

② レーダーで行方をタンサク^{タンサク}する。

④ 紛争解決のタンショ^{タンショ}をつかむ。

I

山紫^{山紫}の地を訪れる。

29

① 花黄

② 大洋

③ 群青

④ 清谷

⑤ 水明

J

李下^{リカ}にを正さず。

30

① 冠

② 衣

③ 面

④ 襟

⑤ 身

(全学共通の問題は終わり)

国語（国語教育専攻）

*ここから先は、国語教育専攻を志願する者のみ、**国語教育専攻の記述式解答用紙**に解答すること。

一 全学共通問題（前掲）の各問いに答え **1** ～ **10**、さらに問 **8** ～ 問 **9** にも答えなさい（記述式 **1** ～ **2**）。

二 全学共通問題（前掲）の各問いに答え **11** ～ **20**、さらに問 **9** ～ 問 **10** にも答えなさい（記述式 **3** ～ **4**）。

三 全学共通問題（前掲）の各問いに答えなさい **21** ～ **30**。

* 次のページ以降にある **四**・**五**の各問いに答えなさい（記述式 **5** ～ **18**）。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

説經の講師は、顔よき。講師の顔をつとまもらへたるこそ、その説くことのたふとさもおぼゆれ。ア ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは、罪や得らむとおぼゆ。このことはとどむべし。A すこし年などのよろしきほどは、かやうの罪得方（えがた）のことは書き出でけめ、今は罪、いとおそろし。

また、「たふとき事、道心おほかり」とて、説經すといふ所ごとに、最初（さいそ）にいきゐるこそ、なほこの罪の心には、いとさしもあらでと見ゆれ。

（注1） 藏人など、昔は （注2） 御前などいふわざもせず、その年ばかりは、（注3） 内わたりなどには、影も見えざりける。今は、さしもあらざる。（注4） 「藏人の五位」とて、それをしもぞいそがしうつかへど、なほ名残つれづれにて、（注5） 心一つは暇ある心地すべかめれば、イ さやうの所にぞ、一度二度も聞きそめつれば、常に詣でまほしうなりて、夏などのいと暑きにも帷子いとあざやかにて、薄二藍、青鈍の指貫など、踏み散らして I ゐ ためり。（注6） 烏帽子に物忌つけたるは、さるべき日なれど、功德のかたには ウ さはらずと見えむとにや。その事する聖と物語し、（注7） 車立つることなどをさへぞ見入れ、ことについたるけしきなる。久しう会はざりつる人の、詣で会ひたる、めづらしがりて、ゐ寄り、物言ひ、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇広うひろげて、口にあてて笑ひ、よく装束したる数珠かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のあしよしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、経供養せしこと、とありしこと、かかりしこと、言ひくらべゐたるほどに、この説經の事は、聞きも入れず。何かは、B 常に聞く事なれば、耳馴れて、めづらしうもあらぬにこそは。

さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、さきすこし追はする車とどめて下るる人、蟬の羽よりもかるげなる （注8） 直衣、指貫、生絹の単衣など着たるも、（注9） 狩衣の姿なるも、さやうにて若うほそやかなる三、四人ばかり、侍の者、またさばかりして入れば、はじめゐたる人々も、すこしうち身じろぎくつろい、高座のもと近き柱もとにすゑつれば、かすかに数珠押しもみなどして、聞きあたるを、講師もはええしくおぼゆるなるべし、いかで語り伝ふばかりと説き出でたなり。聴聞すなどたふれさわぎ額づくほどにもならで、よきほどに x 立ち出づとて、車どもの方など見おこせて、われどち言ふことも、何事ならむとおぼゆ。見知りたる人はをかしと思ふ、見知ら II ぬ は誰ならむ、それにやなど、思ひやり、目をつけて見送ら a るこそ、をかしけれ。「そこに説經しつ、八講しけり」など、人の言ひ伝ふるに、「その人はあり b つや」「いかがは」など、定まりて言はれたる、あまりなり。などかは、むげにさしのぞかでは

あらむ。あやしからむ女だにしみじう聞くめるものを。さればとて、はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき。たまさかには、¹⁰ 壺装束などして、なまめき化粧じてこそはあめりしか、それに物詣などをぞせし。説経などには、ことにおほく聞えざりき。このごろ、**C** そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。

(『枕草子』による)

(注) 1 藏人——ここでは退任した者を指す。

2 御前ごぜん——前驅の敬称。先払い。

3 内——宮中。

4 藏人の五位——五位になって藏人を退任した者を「五位藏人」と区別してこう呼んだ。

5 心一つは暇いとまある心地す——自分としては時間をもて余す気持ちであること。

6 烏帽子に物忌つけたる——自分が物忌に当たつて慎んでいるということを示すための札を烏帽子につけること。

7 車立つること——車をどこそこに置けばよいと指図したりすることを言う。女性は講堂に入らず外で車の中から説経を聞いた。

8 直衣なほし、指貫すずし、生絹ひとへの単衣——貴人の平常着。

9 狩衣かりぎぬ——貴人が身分を隠して出歩く際に着用した平常着。

10 壺装束——女性の外出姿。

問1 「**a**るる」、「**b**つ」の助動詞の本文中における意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、数

字で答えなさい。解答番号は、**記述式 5** ～ **6**。

「**a**るる」**5**

- ① 尊敬 ② 自発 ③ 受身 ④ 使役 ⑤ 可能

「**b**つ」**6**

- ① 過去 ② 強意 ③ 存続 ④ 並列 ⑤ 完了

問2 「立ち出づ」の主体は誰か。次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 7**。

- 「立ち出づ」 **7**
- ① 蔵人 ② 作者 ③ 貴人 ④ 侍者 ⑤ 説経の講師

問3 で囲んだ活用語Ⅰ～Ⅱの本文における活用形として最も適当なものを、あとの①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選び、数字で答えなさい。なお、同じものを重ねて用いても構わない。解答番号は、**記述式 8**～**9**。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| Ⅱ
<input type="text"/> ぬ | Ⅰ
<input type="text"/> ゐ |
| 9 | 8 |
- ① 未然形 ② 連用形 ③ 終止形 ④ 連体形 ⑤ 已然形 ⑥ 命令形

問4 「アひが目しつれば」、「イさやうの所」、「ウさはらず」の本文中における解釈として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 10**～**12**。

「アひが目しつれば」 **10**

- ① よそ見をしてしまうので
② 偏見を持ってしまうので
③ 見誤ってしまうので
④ うそをついたら
⑤ ひねくれたら

「イさやうの所」 **11**

- ① 宮中の殿上の間
② 聴聞する牛車の中
③ 田舎の蔵人の邸宅
④ 説経をしている部屋
⑤ 行幸の前駆をする街路

「ウさはらず」 **12**

- ① 気に入らない
② 手を触れない
③ 差し障りがない
④ 都合が悪くなる
⑤ 仕方がない

問5

「A すこし年などのよろしきほどは、かやうの罪得方えがたのことは書き出でけめ、今は罪、いとおそろし」とあるが、この部分についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 13**。

- ① ほどほどのよい運勢の年は罪を得るような事を書いても問題ないが、今年は物忌みの年で、災難が起こると大変だということ。
- ② 罰当たりなことでも気にせず書いていた若い頃とちがって、今の私は、仏罰が恐ろしいから書くのをやめておこうということ。
- ③ ほどよい年月を過ごした後は罪作りな事も書き残すが、今は書き現わすことは畏れ多いと思い、心にとどめているということ。
- ④ 罪なことというのは年を重ねるうちに自然と書いてしまうものながら、それが、今となってはかえって恐ろしいということ。
- ⑤ 精力的に文筆活動をした時分は罪を暴くようなことでも率直に書いたが、今はそれが罪作りになると思い自重するということ。

問6

「B 常に聞く事なれば、耳馴れて、めづらしうもあらぬにこそは」を現代語に訳しなさい。解答番号は、**記述式 14**。

問7

「C そのをりさし出でけむ人、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし」を現代語に訳しなさい。解答番号は、**記述式 15**。

問8

本文の内容と**合致しないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 16**。

- ① 説経の場に真っ先に座っている聴衆に対して、作者はそこまでしなくてもよいのにと思っている。
- ② 物忌みの謹慎すべき日に烏帽子に物忌みの札をつけて説経の場に聴聞にきている聴衆がいる。

- ③ 聴衆のいる中に貴人もやってくると、説経の講師は面目あることだと感じて説経に熱が入る。
- ④ 説経の講師の顔が美しいと聴衆は見入ってしまい、説経の内容が入ってこないのよくない。
- ⑤ たまには壺装束などの外出姿で優雅にお化粧をして説経聴聞に加えて参詣する人もいる。

問9 『枕草子』の作者と親子関係にある人物を、次の①～⑤の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 17**。

- ① 菅原孝標 ② 藤原道綱 ③ 藤原定家 ④ 藤原道長 ⑤ 清原元輔

五

漢字について、次の問いに答えなさい。

問

A～Eの各傍線部について、A～Bは漢字の読みをひらがなで、C～Eはカタカナに相当する漢字を楷書で、それぞれ答えなさい。
なお、送り仮名が必要なときは、それも書くこと。解答番号は、記述式 **18** A～E。

A 悪事を働き出奔する。

B 客を懇ろにもてなす。

C 軽妙なヒツチのエッセイ。

D 美の世界にチンセンする。

E 残りワズカな日々。

(国語教育専攻の問題は終わり)

（
余
白
）